

# 青柳 文蔵

## — 日本最初の公開図書館をつくる —

青柳文蔵は、宝暦十一（一七六一）年に現在の岩手県一関市東町松川で、医師の三男として生まれました。父が塾も開いていたので、文蔵は幼いころから書物に親しんでいました。一人で本を読み、字を書き写すことが好きな少年でした。

文蔵が十六歳のとき、父は医者の仕事をつがせるために、登米郡米谷（現在の登米市東和町米谷）の医師のもとに修業に出しました。文蔵は医師のもとで修業にはげんでいましたが、十八歳のとき、（医師の仕事をつがせようとしている父には感謝している。しかし、医師は民衆を思い、慈しみをもたなければならぬ。技術だけではだめだ。父への恩返しのためにも、もっと勉強しよう）と心にちかい、儒学を学ぼうと江戸に行くことにしました。

江戸に出た文蔵でしたが、お金がないので読みたい本も買えず、思うように勉強することができませんでした。文蔵は、学問をするために江戸の医師のもとで働くことにしました。

しかし、（やはり、医者は民衆を思い、慈しむために『仁』を学ばなければならない。わたしは、人としてどうあるべきかを学ぶ必要がある）と考え、再び儒学を学ぼうと医師としての道を考え直すようになり、ました。

それからの文蔵は、塾を開いて近所の子どもたちに読み書きを教えたり、農作業を手伝ったりと、いろいろな仕事をしながら細々と生活しました。そのころ江戸では、天候不順や大地震、大火事、火山の噴火など、様々な天災にみまわれただけでなく、飢えでおおぜいの人々が亡くなるなど、世の中が大変不安定になっていました。文蔵は、生き延びるために必死で働きました。極めて貧しい生活を送りながらも、儒学を学ぶ意欲を失わず、少ないながらも得たお金で本を買い、勉強していました。

慈しむ…  
かわいがる。愛する。

儒学…  
中国の孔子がとなえた教えを学ぶ学問。

仁…  
思いやり。儒学では、人々が思いやりをもって生活できる社会の実現を目指すしている。

そんなとき、人生に大きな影響をあたえる本に出合いました。それは、当時の裁判の様子が書かれたもので、百四十四の名判決を集めた『棠陰比事』という中国の本です。

文蔵は、

(何も知らない庶民は訴える方法も知らず、泣きくれている。法律を勉強し、困っている人々の味方になろう)と決心したのです。

その後、文蔵は公事師(現在の弁護士のような職業)になることを目指して努力を重ね、広く名前を知られるようになりました。文蔵は、公事師としてたくさん収入を得るようになり、さらに質屋なども営み、大きな富を成したのです。



本を読む青柳文蔵 (宮城県図書館蔵)

ときが過ぎ、文蔵は六十九歳になっていました。

これまでずっと文蔵の心にあったのは、江戸にやってくるよきの決意でした。

(こうして富を成し、書物に囲まれてはいるが、思うのはふるさとのことである。医業をつがせようとしてくれた父に感謝しているし、残り少ない人生だからこそ、何かふるさとのためになることをしたい)

江戸に来て、貧乏のどん底だった文蔵。読みたい本も買えず、思うように勉強をできなかったところが思い出されます。

そして文蔵は、

(学問への志を抱きながらも達成できない人々に、自分の蔵書を読んでほしい。身分や地位に関係なく、だれでも利用できる、だれでも読むことができる文庫を作りたい。それが、父母、そしてふるさとに対する恩返しである)と考えました。



青柳文庫（宮城県図書館蔵）

当時、自由に書物を読むことができたのは、身分や地位の高いお侍や学者などに限られていました。身分の低い人は、勉強したくても、その願いがかなえられない世の中だったのです。

文蔵が儒学者を志して集めた蔵書は二万余巻にもなりました。そこで文蔵は、それらの蔵書を集めた文庫（図書館）を作りたい立ち、運営基金としての千両（現在の約五千万円）とともに、仙台藩に献上することを願ったのです。

その願いはかなえられませんでした。仙台藩から許可がおりたとき、文蔵は自分の志が殿様に通じたと思いました。

仙台城下の百騎丁（現在の東二番丁）に青柳文庫が建てられました。そこには、二万五千巻ほどの蔵書がありました。仙台藩は役人を二人置き、貸出帳をつけて管理しました。武士や町民、女性、お坊さんなど身分、性別、年齢に関係なく、多くの人々が青柳文庫を利用したということです。

郷里の松川にある「青柳倉記碑」に、文蔵が書いた文章が残っています。文蔵は、その中で青柳文庫のことにふれて、

「書すなわち吾の賢子孫なり……」

と書いています。この言葉には、書物を読むことで、人として知らなければならないことや人としてしなければならないことがわかる。わたしが残す書物を読んで勉強する人が出てくれば、書物こそがわたしにとって親孝行な子どもたちだ、という文蔵の思いがこめられています。

集めた書物を後世に伝えていきたいという文蔵の願いが、文庫と石碑に残されることになったのです。

献上：  
神や身分の高い人に差し出すこと。

青柳文庫は、日本で最初の一般の人々が利用できる図書館といわれています。医学・法律などの専門書や歴史書、詩歌、小説など、幅広い分野の書物が保管され、人々に利用されました。残念ながら青柳文庫の建物は昭和二十(一九四五)年の戦災で焼失してしまいましたが、当時の書物の一部は、今も宮城県図書館や宮城教育大学に保管されています。



青柳文庫の碑 (宮城県図書館蔵)



青柳倉記碑 (宮城県図書館蔵)

#### 青柳文蔵

青柳文蔵は、宝暦十一(一七六一)年、(現在の岩手県一関市)に生まれた。江戸に出て勉学にはげみ、後に公事師(現在の弁護士のような職業)として、大きな富を得た。文蔵は、仙台藩にだれもが利用できる「文庫」の設立を願い出、自分の蔵書や資金を提供した。これは「青柳文庫」と呼ばれ、日本で最初の公開図書館といわれている。

後世：  
今から後の世の中。